

考察のまとめ

□考察のまとめ

ここでは、協議会委員に執筆頂いた考察の中から、本市の子育て世帯の主な傾向及び課題並びに市として必要と考えられる今後の取り組み等のご提案について整理するものとします。

(1) 分析結果からみえた傾向・課題

<乳幼児>

- 低所得層は、一般所得層と比べて早寝、早起き、朝食、歯磨きなどの生活習慣が乱れている状況が伺える。
- 子どもの行動・発達に対する保護者の見方には保護者の自尊感情との関連が伺える。
- 所得階層や自尊感情尺度が低い場合は、子育てに関する悩みが多く、かつ保育所や幼稚園、子育て支援サービスの利用が少ない。
- さらに、悩んでいることについても、配偶者に相談しにくい、相談できる人が少ない傾向が伺え、より孤立していく状況にある。
- 子どもが友達とのやりとり遊びや感情のコントロールなどができていないことが保護者の育児への不安や悩みにつながっていることが伺えることから、これらをトレーニングする機会が必要である。
- 子どもの将来の進学希望においても、所得階層による格差がみられる（低所得層では高校卒業や就業を期待する傾向）。

<小学生>

- 低所得層は、一般所得層と比べて早寝、早起き、朝食、歯磨きなどの生活習慣が乱れている状況が伺える。
- 保護者の自己肯定感が高ければ、子どもの自己肯定感が高まる傾向がある。
- 学校の授業が理解できている子どもは、学校での満足度も高い。
- 子どもの将来の進学希望においても、所得階層による格差がみられる（低所得層では高校卒業や就業を期待する傾向）。

<中学生・その保護者>

- 低所得層は、一般所得層と比べて早寝、早起き、朝食、歯磨きなどの生活習慣が乱れている状況が伺える。
- 低所得層の子どもの自己肯定感は低く、その保護者の子どもへの進学期待も低い。
- 低所得層の子どもたちの学力は低く、かつ進路意識も低い状況にあり、その保護者の子どもへの進学期待も低い。
- 保護者の自己肯定感が高いと、その子どもの自己肯定感も高くなる。
- 学校生活の充実度は、相談できる相手がいるかどうかということが重要な要素となっている。
- 低所得層の子どもの中にもわずかであるが、自己肯定感が高く、学力も高い子どもたち（レジリエント・スチューデント）がいる。
- レジリエント・スチューデントは、生活習慣が確立されている。

＜中学卒業生・その保護者＞

- 低所得層は、一般所得層と比べて早寝、早起き、朝食、歯磨きなどの生活習慣が乱れている状況が伺える。
- 低所得層の子どもの保護者の自己肯定感は低い。
- 低所得層の子どもの全日制高校の在学率は低い（ひとり親世帯も同様）。
- 基本的な生活習慣が身につけていない子どもたちの進学意識は低く、その保護者の進学期待も低い。
- 保護者の自己肯定感が高いと、その子どもの自己肯定感も高くなる。
- 学校生活の充実度は、相談できる相手がいるかどうかということが重要な要素となっている。
- 低所得層の子どもの中にもわずかであるが、自己肯定感が高く、学力も高い子どもたち（レジリエント・スチューデント）がいる。
- レジリエント・スチューデントは、生活習慣が確立されている。

（２）傾向と課題を踏まえた今後の取り組み等

- 保護者を対象とした自尊感情や自己肯定感を高める保護者支援プログラムの実施
- 早寝、早起き、朝ごはん等の基本的な生活習慣の確立に向けた取り組みの推進
- 学校や家庭における子どもが相談しやすい雰囲気づくりへの取り組み
- 身近な地域で子育て相談できる体制や家庭訪問による相談の実施など相談支援体制の強化及び健診など現在実施されている場の活用促進
- 貧困の連鎖を断ち切る総合的な子育て支援策の検討・実施